

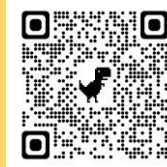
令和8年度病害虫発生予察情報 発生予報第4号(6月)

令和8年6月30日

発表：福島県病害虫防除所

【注意が必要な病害虫】

普通作物	■ 水稲：斑点米カメムシ類 -②
果樹	■ リンゴ：キンモンホソガ -② ■ ナシ：黒星病 -②
野菜花き	■ キク：アザミウマ類（令和8年5月26日付け防除情報参考）-①



病害虫防除所
HPは
←こちらから



病害虫に関する
防除対策の
ページは
←こちらから

※ 上記の表に記載された病害虫は、下記の①～③に該当します。

- 注) ①現状において、注意報レベルの防除を要すると判断された病害虫
 ②「1 主な病害虫の発生予報」のうち、予察調査の結果、発生時期が「やや早い」、発生量が「やや多い」と予測された病害虫の中で特に懸念される病害虫
 ③「1 主な病害虫の発生予報」以外で調査の結果、今後、県全域的に発生が多く問題になると判断した病害虫

1 主な病害虫の発生予報

(1) 普通作物

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
水稲	いもち病(葉いもち)	全域	平年並	平年並	天候予報(6月25日発表1か月予報)によると、向こう1か月の降水量は平年並と予想されている(±)。	発生の早期発見、早期防除に努める。特に多肥田では発生しやすいため、注意する。置苗は、葉いもちの発生源となるため、水田内に放置せず早急に処分する。
	紋枯病	全域	平年並	やや多	昨年の発生はやや多く、天候予報によると、向こう1か月の気温は高いと予想されている(+)	前年の発生が多かった場合は、薬剤散布を実施する。気温が高いと上位葉鞘への伸展が早まるため、注意する。
	斑点米カメムシ類	全域	-	やや多	6月中下旬の畦畔での発生地点割合は浜通りでやや高く、中通り及び会津は平年並であった。天候予報によると向こう1か月の気温は高いと予想されている(+)	畦畔や水田周辺のイネ科雑草の穂は斑点米カメムシ類の増殖源になるため、草刈りを励行し、イネの出穂10日前までに終了させる。

注) 予報の根拠の中で (+) は多発要因、(-) は少発要因、(±) は平年並要因であることを示す。

(2) 果樹

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
リンゴ	斑点落葉病	全 域	—	平年並	6月中下旬の新梢葉での発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	
	褐斑病	全 域	—	平年並	6月中下旬の新梢葉での発生は確認されず、発生ほ場割合は、平年並であった(±)。 果そう葉での発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	梅雨期は二次感染を繰り返す恐れがあるため、発生が認められる園地では防除対策を徹底する。 薬剤散布は降雨前の実施を心がけ、散布間隔があきすぎないように注意する。
	黒星病	全 域	—	平年並	6月中下旬の新梢葉及び果実での発生は確認されず、発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	発病部位は見つけしだい除去し、園外に持ち出すなど適切に処分する。 薬剤散布は降雨前の実施を心がけ、散布間隔があきすぎないように注意する。
	キンモンホソガ	県 北 県中・県南、会津	— —	やや多 平年並	県北の6月中下旬の新梢葉での発生ほ場割合は、平年よりやや高かった(+) 。県中・県南、会津では平年並であった(±)。	農作物病害虫防除指針や地域の防除暦を参考に防除を徹底する。
	ハダニ類	全 域	—	やや少	6月中下旬の新梢寄生の発生ほ場割合は平年よりやや少なかった(-)。	要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、殺ダニ剤を散布する。
モモ	灰星病	県 北	—	平年並	6月中下旬の果実での発生ほ場割合は平年並であった(±)。	薬剤散布は降雨前の実施を心がけ、散布間隔があきすぎないように注意する。
	せん孔細菌病	県 北	—	やや少	6月の新梢葉及び果実での発生は確認されず、発生ほ場割合は平年よりやや低かった(-)。	梅雨期は発病が急増するおそれがあるため、引き続き注意が必要である。 罹病部位は見つけしだい除去し、園外へ持ち出すなど適切に処理する。
	モモハモグリガ	県北	—	やや少	6月中下旬の新梢葉被害の発生ほ場割合は平年よりやや低かった(-)。	本種の発生には放任園や無防除のハナモモ園が影響していると考えられるため、こうした発生源が近隣に存在する園地では、今後も発生に注意する。

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
モモ	ハダニ類	県北	—	平年並	6月中下旬の新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、殺ダニ剤を散布する。
ナシ	黒星病	県北、県中・県南 浜通り	— —	やや多 平年並	県北、県中・県南での6月中下旬の果実での発生ほ場割合はやや高かった(+) 。 浜通りでは平年並であった(±)。 県中・県南での新梢葉での発生ほ場割合は平年よりやや高かった(+) 。県北・浜通りでは平年並であった(±)。	梅雨期は二次感染により黒星病の発病が急増するおそれがあるため、罹病部位は見つけしだい取り除くなど、耕種的防除を徹底する。 「幸水」では本病に対する果実の感受性が高まる時期(満開後50~90日)なので、防除を徹底する。 薬剤散布は降雨前の実施を心掛け、散布間隔があきすぎないように注意する
	ハダニ類	全域	—	平年並	6月中下旬の新梢葉寄生の発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、殺ダニ剤を散布する。
果樹共通	カメムシ類	全域	—	平年並	6月中下旬において、調査ほ場への飛来は平年並であった(±)。	園内をこまめに見回り、成虫の飛来状況をよく確認する。成虫が次々に飛来し被害が懸念される場合には速やかに薬剤防除を実施する。

注) 予報の根拠の中で (+) は多発要因、(—) は少発要因、(±) は平年並要因であることを示す。

(3) 野菜、花き

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
夏秋トマト(被覆栽培)	灰色かび病	全域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	発病葉は摘除し、防除を徹底する。 多湿条件で発生が多くなるので換気を十分に行う。
	葉かび病	全域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	多湿条件で発生が多くなるので換気を十分に行う。
	アブラムシ類	全域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
夏秋トマト(被覆栽培)	コナジラミ類	全域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。 県内の一部ほ場では、トマト黄化葉巻病の発生が確認されている。薬剤による防除を徹底し、葉裏まで薬剤がしっかりとかかるように防除する。
夏秋キュウリ(露地栽培)	べと病	全域	—	やや少	発生ほ場割合は、平年より低かった(-)が、天候予報によると向こう1か月は平年と同様に曇りや雨の日が多いと予想されている(+)	多湿条件が続くと発病しやすくなるので、発生初期から防除を実施する。
	うどんこ病	全域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	まん延すると防除が困難となるので、発生初期から防除を実施する。
	炭疽病	全域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	発病葉は摘除し、発生初期から防除を実施する。 排水対策の徹底、過湿防止、資材の消毒に努める。
	斑点細菌病	全域	—	やや多	発生ほ場割合は、平年並であった(±)が、天候予報によると向こう1か月は平年と同様に曇りや雨の日が多いと予想されている(+)	被害茎葉をほ場外に処分する。発病後の防除は難しいため、予防散布を行う。
	モザイク病	全域	—	やや多	発生ほ場割合は、平年よりやや高かった(+)	ウイルスを媒介するアブラムシ類の防除を行う。また、ほ場周辺の除草を行い、発病株はできるだけ早く除去する。
	アブラムシ類	全域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、すみやかに防除を実施する。 ウイルス感染株が発生している場合は、速やかに抜き取る。
	ハダニ類	全域	—	やや多	発生ほ場割合は、平年よりやや高かった(+)	ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。薬剤抵抗性の発達が懸念されるため、異なる系統のローテーション散布を実施する。

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
キク(露地栽培)	白さび病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	多湿条件が続くと発病しやすくなるので、予防散布に努める。 品種により発病に差があるので、発病しやすい品種では防除を徹底する。
	アブラムシ類	全 域	—	やや少	発生ほ場割合は、平年よりやや低かった(-)。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	ハダニ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	気温が高くなると、急激に発生量が増えるため、低密度時から防除を実施する。 抵抗性の発達が懸念されるため、防除薬剤の選択に注意する。
	アザミウマ類	全 域	—	やや多	発生ほ場割合は、平年よりやや高かった(+)	ほ場をよく観察し、葉裏まで薬剤がかかるように防除を徹底する。
	ハモグリバエ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	上位葉での発生に注意し、低密度時から防除を実施する。
リンドウ	葉枯病	全 域	—	やや多	発生ほ場割合は、平年よりやや高かった(+)	多湿条件で発生が多くなるので、予防散布に努める。
	ハダニ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	気温が高くなると、急激に発生量が増えるため、ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。
	リンドウホソハマキ	全 域	-	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は速やかに防除を実施する。
野菜・花き共通	タバコガ類	全 域	-	平年並	発生ほ場割合は、平年よりやや低かった(-)が、県北地域では、フェロモントラップの誘殺数が増加傾向である(+)	キクでは生長点付近、トマトでは果実等をよく観察し、寄生や被害が見られた場合は、速やかに防除を行う。

注) 予報の根拠の中で (+) は多発要因、(-) は少発要因、(±) は平年並要因であることを示す。

2 発生が懸念される病害虫

リンゴ ・モモ・ ナシ等	<p>■ ナシヒメシンクイ</p> <p>ナシヒメシンクイ第2世代成虫の誘殺盛期は、気温が2℃高く推移した場合、7月3半旬頃と予測され、第3世代の防除適期は7月5半旬頃と推定されます。(農業総合センター果樹研究所(福島市)、6月25日現在)。</p> <p>本種は主にモモなどの核果類の新梢伸長が停止するとナシ果実への寄生が増加します。例年、ナシでの果実被害が多い地域では、近隣のモモなどにおける防除も徹底してください。なお、薬剤による防除を実施する場合には、使用基準を遵守してください。</p> <p>■ カイガラムシ類</p> <p>ナシマルカイガラムシ第2世代ふ化開始は、今後の気温が2℃高く推移した場合、7月5半旬頃と予想され、ふ化盛期は8月1半旬頃と推定されます(農業総合センター果樹研究所(福島市)、6月25日現在)。</p> <p>カイガラムシ類はふ化期の防除が重要であるため、防除適期を逃さないように防除を徹底してください。</p>
ブドウ	<p>■ 晩腐病</p> <p>幼果期の防除終了後速やかにカサ掛けを行ってください。カサは雨もりを防ぐように丁寧に行いましょう。また袋かけ前の防除終了後は、速やかに袋掛けを行いましょ。</p>
トマト	<p>■ トマト黄化葉巻病 (TYLCV)</p> <p>夏秋トマトほ場において、トマト黄化葉巻病の発生が確認されています。発生が確認されたら、コナジラミ類の防除を徹底してください。また、発病が疑われる株については、速やかに抜き取り処理を行ってください。</p> <p>病害虫防除所ホームページでも情報を掲載しているため、下記の URL も参考にしてください。 病害虫防除所 HP でも情報を掲載しているため、下記の URL も参考にしてください。</p> <p>【注意喚起～トマト黄化葉巻病 (TYLCV) のまん延防止対策～】 https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/544337.pdf</p> <p>【トマト黄化葉巻病 (TYLCV) 対策 チラシ】 https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/648953.pdf</p> <p>【トマト黄化葉巻病 (TYLCV) 対策 パンフレット】 https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/648954.pdf</p> <p>■ トマトキバガ</p> <p>県内の夏秋栽培ほ場の複数地点で、幼虫による葉や果実の被害が確認されています。ほ場をよく観察し、被害の早期発見・防除に努めましょう。また、被害葉や被害果実は摘み取ってビニール袋等に入れて蒸し込みし、完全に死滅させてください。</p>
キク	<p>■ わい化ウイルス (CSVd)</p> <p>県内の複数ほ場においてわい化ウイルスの症状が発生しています。葉が淡緑化し、草丈が短いまま生育が停止します。また、特徴として、節間が短縮してわい化することで見分けることができます。</p> <p>感染株の抜き取り、健全苗の親株選抜、作業に使用するハサミの消毒を実施し、感染拡大に努めましょう。</p>